

南京 4 日感受

翁晓丹（立命馆大学文学研究科研修生）

这次我是边做简单翻译边参加了这次活动。去年7月份曾参加过在立命馆举行的工作坊，所以对这次南京之行又期待又有些不安。因为我大学时代就是在南京度过的，在那里学习了日语，对我来说南京是个充满回忆的地方。来到历史事实发生地，用中国人还没有习惯和认识的戏剧疗法进行工作坊，对此我有些不安。另外，如果我参加的话，会感觉到什么，之后我又能怎样处理那些收获，对此我完全没有把握。

会议一周前，我祖父去世了。死亡到底意味着什么？我一边沉浸在这个问题中，一边参加了活动。

我一直都很抵抗以政治和军事目的解释历史，将这种历史观通过教育或者大众媒体的方式控制国民思想。因此很久以前我就试图在中日历史问题上保持中立，但是因此遇到了很多挫折。工作坊刚开始的阶段，我一直矛盾于自己所站的立场是日方，还是中方，还是中立。日方参加者感觉到的痛苦、悲伤和罪恶感，也传达到我的心里。与此同时，作为中国人的痛苦、悲伤和愤怒，还有试图中立，却感到了无边无际的孤独感和绝望，这三重的感情重叠着，令自己几乎无法呼吸。

幸好，活动为大家提供了一个令人安心的场所。日方的参加者一直在我身边，中方的学生那里我也感受到了被接纳的温暖。从工作坊的第二天开始，我感觉自己的心灵和身体得以放松，向周围的人开放。

另外，我也很惊奇于自己身体的反应。第二天的工作坊中，用中文说“我是中国人”的时候，我感觉到自己身体中有一些热热的东西涌出来，这是我至今为止从未有过的体验。我一直在脑子里问自己；“我怎么会流泪呢？”在我脑子理清清楚之前，眼泪已经淌了下来。身体先于自己的意识和感情做出反应，这样的情况在第二天上午幸存者证言的部分也出现了。从常大爷微笑进入会场开始到结束，我的眼泪就一直没有止住。这是一次非常不可思议的体验。但是，之后我感觉到一直积压在胸中的东西似乎得到了释放。

敏感地感受到自己的身体和心的变化的同时，也敏感的察觉到其他人的心情，这种共感力在这四天中有了提高。

另外、这次去南京我也感受到了一种使命感。我不仅希望能有很多的中国人认识戏剧疗法或艺术表现疗法，也希望能给和平教育带来一点新的形式和启发，为此我们还有很多必须做的事情。

热切期望和各位在南京再相会！

9

南京のワークショップを終えた感想

城尾聡子（立命館大学応用人間科学研究科）

南京の6日間を振り返って、南京に行くことができて良かったと感じている。実際に南京師範大学の学生と戦争のことや、実際彼らが体験してきた家族の悲しみ。日本兵に対する憎しみ、怒りといったものも感情で分かち合うことができた。それは世界中のほかの国のどこでもない「南京」という土地に行ったからこそ自らも心で感じることができたのだと思う。

私は、このワークショップに参加する前に、日本で南京大虐殺に関する本を読む勉強会に参加したり、村本先生の講義を聞いたり、アルマンド先生のワークショップに参加したりして、ひとつひとつの階段を上っていくように理解を深めてきた。私は、ドラマセラピーが異なる言語を話す集団の中で今回行われたことに非常に有効性を感じている。中国の学生が真摯に我々に向き合って悲しく残酷な過去の記憶を日本の学生に話してくれ、日中の次の世代の真の平和を願うと話す姿に心を打たれた。また自分の心の表現をドラマや彫刻や粘土で表現することで言語を超えた心の分かち合いができたと感じている。

さらに、平和というものがいかに脆弱なものであるかということを、今回のセミナーを通して感じた。日本人と中国人は顔も体つきも何ら大差はない。しかし、戦争というものはとても簡単に人間を鬼に変えてしまうのである。現在の日本は平和であり、自分が生まれたときから平和はそこにあたりまえにあるものであった。しかし、平和を心から希求して平和のありがたさを心から話してくれた生存者の話を聞いた後、平和とはただあるものではなく、我々がしっ